

とある科学の黄昏勇気

たらしあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

物心ついた時には実験漬けの毎日だった

人の闇 科学の闇 学園都市の闇

それらに絶望しながらも彼は歩き出す

一人の少女を守るために

目次

第三話	第二話	第一話
13	6	1

第一話

「――勇気――。ちょっと良い子にお留守番してね――」

「――で、でもママとパパは……。――」

「――だ――いじよーぶ。すぐに戻るよ――」

「――何でも好きなお菓子買ってきてあげるから、ね――」

「――わーい！やった――！ぼく良い子にしてるね――」

両親が家を出た。それに代わるように家に入ってきたのは黒服の男。

「――あなたはだあれ？――」

男は何も言わずスプレーを取り出し、少年に吹き掛けた

「――ンン!? パパ、ママ、たすけ……。――」

見慣れた天井。見渡す限り何もない部屋。

「――チツ。最低の気分だぜ。」

黒髪黒目の美少年、黄昏勇気（たそがれ ゆうき）はベッドの上で心底不機嫌そうに言った。

「――最近この夢ばつかだな。ハツ、くっだらねえ、14歳にもなつて親でも恋しくなつたかあ？」

答える声は――無いらしい。

それもそのはず、ここ『新世代超能力者研究所』は学園都市統括理事会直属の研究所であり、理事会が指名した者しか入ることができないトップシークレットの研究所なのだから。それだけでいかに彼が特別な存在かがわかるだろう。

「黄昏勇気。そこに置いてある朝食を食べたら実験場に来い。概要はそこで説明する。」

ドア越しに研究者が彼に呼び掛ける。

「わかっている。さっさと失せろ。」

言いながら、彼は床に置かれてある服に着替え、机に置いてある朝食を食べた。

「今日も退屈な一日が始まるぜ。」

愚痴をこぼしながらも実験場に向かう。

そこで彼はこちらに向かつてくる人物に気が付いた。二人の研究者、その間に一人の少女がいた。勇気と同じ位の年だろうか、髪は白でとても整った顔立ちをしている。しかしその顔には表情が無く、目も死人のようだ。

「よお。見ない顔だな、お前」

基本的にここ『新研』で人と会うこと自体が珍しいので、彼は少し少女が気になり声をかけたが

「…。」

完全無視。彼は頬をひきつらせながら

「まあ、『新研』だしああいう奴もいるよな、うん。」

と無理矢理自分を納得させ、再び実験場へと足を向けた。

「よお雑魚、遅かったじゃねえか。この俺様を待たせてんじゃねえよ実験動物。」

実験場に着いていきなり勇気に罵詈雑言を言ったこの人物こそ、ここ『新研』の代表である木原正弦（きはら せいげん）である。彼は中位の木原であるが、能力開発に関しては一流であり、勇気的能力開発者でもある。

「よお木原サイン、その不細工な面を待ってる間に少しでもマシにしてほしかったぜ。」

「言ってる。さてさて、楽しい楽しいトークンタイムはフィニッシュだぜえ。ここからは飼い主と実験動物の関係なんだからおとなしくしてろよ駄犬?」

「ハハッ。俺って駄犬だからうっかりお前の喉元噛みきっちゃうかもなあ。」

これを木原は無視し、

「まずはいつも通り一世代前の駆動鎧と闘ってもらおう。制限時間は一分だ。簡単だろお?」

「前置きはいい。さっさと始めろ。」

「ハイハイ。じゃあ駆動鎧、投下だぜえええええ!」

天井から溢れんばかりに飛び出してくる駆動鎧。

「言い忘れてたが相手は一機じゃなくて…一万機だけだな。ギャハハハハ！」

「ハハツ。確かに一万機も用意するとは思わなかったよ。だけどなー」

勇気が手を天井に向けた途端、

重力に従って落ちてきていた駆動鎧が勢い良く上昇し、天井とぶつかってはぜた。

「ーレベル4の物理支配(エンペラー)には一機も一万機も、誤差の範囲なんだよ。」

「…所要時間三秒。チツ、つまんねえ能力だぜ、てめえの物理支配(エンペラー)はよお。」

黄昏勇気的能力、物理支配(エンペラー)はこの世界の物理法則を操ることができる能力だ。例を挙げると、前に走っているのに後ろへと進んだり、先ほどの戦闘のように重力の向きを逆にすることもできる。

「とは言うもののまだ完璧じゃあないな。能力範囲をもっと広げることが出来るはずだ。まあでも、こればかりは演算能力を上げるしかないんだよなあ。」

「半径十メートルが能力範囲。しかもその範囲だったらあらゆる物理法則の矛盾を乗り越えて事象を起こすことができる。ある人は普通に歩けるが、違う人は前に歩くと後ろへと進む、みたいにな。これでもまだ足りないとか無能力者に殺されるぞ、お前。」

「その時はその時さ。さてと、ストレッチは終わりにしようぜ。実験はこっからなんだろ、木原。」

勇気がそう言うと、木原は不気味に笑い、

「当然だ。と言っても、今日はお前が練習台なんだわ。主役はこっちだ。」

木原がそう言って指を鳴らすと、天井のパッチが開き、一機の駆動鎧が落ちてきた…と思ったら空中で止まっている。勇気は少し目を見張り、

「へえ。スゴいな、滞空機能がついてるのか。」

「ああ。表面はダイヤモンド並の固さがありながら、弾力もある。飛ぶ原理としては、全身から放出する風をオートで調節するからだな。」
「なるほどな。だがあれじゃあ武器を装備できないな。手のひらからも風を出してるんだろ?」

「まあな。現状では肉弾戦しかできない。だがレベル3までなら問題無く潰せる性能を誇る。だからこそレベル4のお前と闘わせたいってことだ。」

「最高だな。ところで一つ聞くんがあれは無人か?」

「当然だ。木原が有人なんて中途半端なことをするとおもうか?」

勇気は不敵に笑い、

「それなら遊んでやるか。」

その言葉と同時に飛行駆動鎧が高速で下降してきた。

「ハッ、来いよ機械。格の違いを教えてやるぜ。」

そう言うと同時に勇気は腕を軽く振り、空気中の分子を猛烈な速さで動かして突風を起こした。それで飛行駆動鎧は風の調節が出来なくなるかと踏んでいたのだが、

「へえ。さすが木原製、やるじゃねえか。」

突風を調節どころか利用して先ほどの倍以上の速さで勇気に迫ってくる。しかし勇気は自分以外にかかる重力を通常の10倍にする。重力は調節できないのか飛行駆動鎧は地面に落ちていく。これで終わりと思われたが、

「まだ終わらないぜええええ!」

なんと勇気は研究所の床をダイヤモンド並の固さに変質させた。同じ強度の物体が勢い良く激突したら起こる結果は明らかである。

「まったく、俺様の作品を壊しやがって...。」

「仕方ないだろ。力量の差がありすぎたからな。」

「チツ、まあ良い。おい、明日はお前の外出許可日だ。好きにするんだな、実験動物。」

「やったぜ! 待ってました! じゃあ今日はもう寝るから! あばよ、木原!」

勇気はきつと楽しいであろう明日に思いを馳せながら自室へと足

を向けた。

第二話

携帯のアラームがけたたましく鳴る。

勇氣はベッドから飛び降り、

「今日のはあの夢も見なかったし、外出もできるしで最高の一日になりそうだけ！」

いつもの不機嫌そうな態度は無く、満面の笑みを浮かべて言った。勇氣が手早く私服に着替えて外出の準備を整えると同時に

「黄昏勇氣。今から外出許可時間だ。19時には帰って来るように。」

その言葉を言い終えるか終えない内に勇氣はドアを開けて研究所のフロントを目指した。その時、彼は昨日の少女が見えた気がしたが今日は早く外に出たかったので素通りした。フロントに一人の男が見える。あれは…

「おう雑魚。言われたかもしれないねえが門限は19時な。ギャハ、今日楽しんだ分明日絶望しないように気を付けるんだなあ。」

やはり木原だった。流れるように嫌味を言うが、

「もちろん！」

勇氣はそんなもの気にせずすぐに外に出た。

「チツ、調子狂うぜ、つたくよお。」

今日は7月20日。8月程ではないが、学園都市では25度を超え、中々の暑さになっている。勇氣は何か飲み物が欲しくなり、公園に置いてある自動販売機へと足を向けた。が、そこで目にした光景は「チエイサーー……！」

と言って自動販売機の側面に蹴りをいれる勇氣と同一年位の美少女であった。勇氣は呆然として彼女を見てみると、視線に気が付いたのか彼女は勇氣を振り返って見た。

「……………」

「……………何よ。」

ガコンと音がしたので勇氣は自動販売機を見てみると、飲み物が出てきていた。

そう、つまり無銭飲食である。

勇気は無言で携帯を取り出し、警備員(アンチスキル)の番号をプッシュするが、

「ちよつと待ちなさいーいー！」

彼女は素早い動きで勇気の携帯を奪い取り、説得を試みる。

「私はこの前ねえ、このとんちんかんな自動販売機に一万円を飲まれたのよ！だから私はお金を払わなくても良いのよ！」

勇気は呆れながら

「あのなあ、学園都市の機械は全てが超最先端なんだぜ？そんなアホな機械があるわけねえだろ。とんちんかん。」

彼女はムググツと唸り、

「そこまで言うならあんた一万円入れてみなさいよ！」

「まあ良いけど。」

勇気は懐から高そうな財布を取り出し、払おうとするがその前に彼女が、

「ちよつと待ちなさい。あんた私をこんだけ馬鹿にしたんだから、私と勝負しなさい。」

「勝負？戦闘でもするのか？」

「それでも良いけどあんたが私に勝てるはずが無いからね。今回は賭けをしましょう。」

「なるほどな。一万円を飲まれたらお前の勝利、飲まれなかったら俺の勝利ってことか？」

彼女は目を見張りながら、

「あんた、物分かりが良いのね。」

「話が早くて良いだろ？」

彼女は不敵に笑い

「そうね。付け加えるなら、負けた方は勝った方の言うことに何でも一つ従うっていう罰ゲームつき。」

「ハッ、良いぜ。お前の悔しそうな顔が目には浮かぶぜ。じゃあ、いくぜ！」

勇気は自動販売機にお金を投入するが、飲み物の選択ボタンが光ら

ない。つまり……

「飲まれたあああああ！」

「やったー……！」

笑顔で跳び跳ねる美少女と、悔しそうに唸る美少年は端から見ると微笑ましく見えたという。

「くっ、俺の負けだ。お前に従うよ。」

「ふふん。あ、でも一つ命令の前にお願ひしていい？」

「物によるな。言ってみろよ。」

「その『お前』っていうのやめてくれない？私もあんたのこと名前で呼ぶから。」

「そんなことならいいぜ。俺達はもう友達だからな。」

それを聞いた途端、彼女は向日葵のような笑顔を浮かべ、

「友達……そうね！私は学園都市第三位、御坂美琴。あんたは？」

「俺はレベル4の物理支配(エンペラー)、黄昏勇氣だ。よろしくな、御坂。」

それを聞くと御坂はキョトンとした顔になり、

「あん……勇氣って私がレベル5って聞いても対応を変えないの？」

勇氣は心底不思議そうな顔をし、

「レベル5だって一人の人間だろ？それに、少なくとも俺の目には御坂は普通の女の子にしか見えなかった。ならそれでいいだろ。」

それを聞いて御坂はクスツと笑い、

「勇氣って面白いわね。ねえ、折角だし携帯番号交換しない？」

「ああ、いいぜ。」

「ーピロリーンー」

「よし！これで私達は本当の友達ね！」

「ああ、じゃあ罰ゲームの話に戻るか。」

「えーと……私には三人の大切な友達がいるの。レベル5なんて人から畏怖の目で見られる存在なのに……。その人達と今日お昼御飯を食べるの。だから……勇氣にも会ってほしいなあって」

「俺って暇だし、命令じゃなくても会うさ。それに御坂が一目置いている人達に会いたいしさ。」

「そう！じゃあ付いてきて！」

Joseph, s---

「あ！遅いですよ御坂さーん！」

黒髪ロングの元気がいい女の子が御坂に気付き声をかける。

「三人共ごめんねー。ちよつと友達と会っちゃっ…」

御坂の言葉に被せるように勇気が、

「美琴の彼氏の黄昏勇氣だ。いつも美琴と仲良くしてくれてありがとう。今日は俺も参加させてほしいな。」

と言ったので、女子達の恋愛スイッチが入ってしまったのか、黒髪ロングの少女が

「御坂さん、こんなイケメンの彼氏がいるなら教えてくださいよー！水くさいじゃないですかー！」

次に頭に花飾りを着けた少女が、

「ふわー！御坂さん、流石ですー！」

最後にツインテールの少女が、

「おねえええええさああああまあああああああ!!黒子が、黒子とこういうものがありながらああ!!」

これには御坂も動揺してしまい、

「ちよつと勇氣、なんとかしなさいよー！」

「ハハハハハ！面白いなあ君たちは。」

――10分後――

「じゃあ改めて自己紹介だな。俺の名前は黄昏勇氣。能力はレベル4の物理支配（エンペラー）だ。よろしくな。」

次に自己紹介したのは黒髪ロングの少女。

「私の名前は佐天涙子（さてん るいこ）です。レベルは0ですー！」

花飾りの少女

「私の名前は初春飾利（ういはる かざり）です。よろしくお願いします、勇氣さん。」

ツインテールの少女

「私の名前は白井黒子（しらい くろこ）ですの。レベル4の空間移動

(テレポート)で初春同様ジャッジメントで活動してますの。」

「オーケー。皆、よろしくな。」

五人で談笑していると、唐突に佐天が勇気に尋ねてきた。

「そういえば、勇氣さんの、えーと…物理支配(エンペラー)ってどういう能力なんですか?」

「確かに私と公園で話した時も聞いてないわね。」

それを聞くと、勇氣は笑って、

「そういえば言っただけじゃなかったな。皆さえ良ければ、今簡単に説明するよ。」

四人が興味深そうに頷いたので勇氣は説明し始めた。

「俺の物理支配(エンペラー)は俺を中心とした半径十メートル以内なら、どこでも、好きなように物理法則を操ることができる能力なんだ。」

四人は首を傾げながら府に落ちなさそうな顔をしている。

「ハハッ、これじゃあ分からないよな。今から俺の能力を軽く披露するよ。じゃあ、佐天。」

「なんですか?」

「その箸をテーブルの上で右に転がしてくれ。」

「分かりました。」

と佐天は言っただけで箸を右に転がすが、

「「「ええええ!!」」」

箸は真逆の左に転がった。

「今のは『物体は力を加えた方に動く』という物理法則を、『物体は力を加えた方と逆に動く』という風に改変したのさ。」

「す、すごいわね…。」

「じゃあもう一つだけ披露しよう。少し待っていてくれ。」

そう言っただけで勇氣が持ってきたのはホットコーヒー。

「初春。君の能力は定温保存(サーマルハンド)だったよね?」

「はい。レベルは1ですが…。」

「つまり物体の保温ができるってことだな。なら俺の能力披露に協力してくれ。」

「はい。」

「まあその前に、皆は温度が高い時の分子の状態を知ってるかい？ほい御坂。」

「分子が速く振動してるんでしょ。」

「その通りだ。それを頭に入れてくれ。じゃあ初春さん、このコーヒーを保温して。皆はこのカップを触ってくれ。」

「保温の演算完了しました！」

「オーケイ、じゃあ始めよう。」

その言葉と同時にコーヒーカップがどんどん冷たくなっていく。その事態に初春は

「え!?演算は間違っていないはずなのに!？」

「ハハッ。じゃあ回答コーナーだ。分かった人はいるかい？」

手を上げたのは御坂と白井の二人。

「白井。」

『分子が速く振動すれば熱くなる』という物理法則を『分子が速く振動すれば冷たくなる』という風に変えたんですのね？」

「お見事。パーフェクトだ。」

「へー!すごいなあ。」

「そんなことないよ。じゃあ俺の能力講座は終わりだな。話変えるけど皆はなんかめぼしい話題はあるのかい？」

「それがですねー」

「あ、もう夕方ですね。」

「いっぱい話したから時間が早く経っちゃったよー。」

「じゃあもうお開きにしましょうか。」

「そうだな。」

「あ、勇氣さん! 私達と携帯番号交換しましょうよ！」

ーピロリーンー

「それじゃあ今日は本当に楽しかったです! また皆で集まりましょう!」

「御坂さん、白井さん、勇氣さん、また会いましょう。」

と言って佐天と初春が帰っていった。

「黒子、私達も帰りましょうか。」

「そうですね、お姉様。」

「あ、勇気。．．今日は楽しかった？」

勇気は微笑み、

「誇張じゃなく、人生で一番。」

御坂は笑って、

「そうーそれなら良いのよ。じゃあ、またね！」

「勇気さん、ごきげんようですの。」

その言葉と共に二人は虚空へ消えた。

勇気は頭を掻きながら、言った。

「ああ、本当に楽しかったよ。ありがとう、御坂。」

ーこの後すぐに闇が勇気を襲うのを知らずにー

第三話

御坂達と離れて手持ちぶさたになった勇氣は研究所に戻ろうとしていたのだが…

(どうも辺りがおかしい…)

まだ夕方の6時位なのに人が全くいない。今日は休日なのだから、もつと人がいてもいいはずだ。

(あいつの手を借りるのは癪だが…)

勇氣は携帯を取り出し、ある人物に電話をかけた。相手は勿論…

「よーお勇氣ちゃーん！寂しくなったのかなあーん？」

勇氣は声に殺気を込め、

「木原。急ぎの用だ。第七学区で不自然に人がいないところをサーチしろ。」

「ああ？つたく、ちよつと待ってる。」

少しの間キーボードの音が耳に入り、

「お前の近くに学生寮があるだろ？そこから半径約10メートルにわたって無人になっているぜ。」

「つまり。」

「ああ。」

「「そこが鍵だ。」」

「分かった。ありがとよ、木原。」

「おい。」

「ああ？」

「門限は俺の気分で勝手に変えた。また追って連絡する。」

「ハッ、そうかよ。そりゃどーも。」

勇氣は携帯を仕舞い、第七学区へと向かった。

ーが、いつまで経っても到着しない。勇氣はまるで迷路に迷ったような気分になる。勇氣は一旦歩みを止め、深い思索の渦に入った。

(木原の言った通りあの学生寮から半径10メートルの中に入れない。つまり陸上からあそこに到達する手段はない。なら空からは？

仮に『無人の円』が球形でなく円形ならば、三次元的な移動は防げないはずだ。そうと決まったら…。)

勇氣は自身にかかる重力をほぼ0にして空中に浮き、分子の動きで突風を起こすことで、空高く飛翔した。高度30メートルを飛んだところ、あの学生寮に近づくことができた。勇氣は学生寮の真上で止まり、

「はっ!!!」

と大声を出したところ何者かが叫ぶのが聞こえた。そう、勇氣はただ大声を出したのでは無く、『音に質量を持たせ』ていたのだ。勇氣は不気味に笑い、

「そ…か。」

その言葉と同時に勇氣は何者かがいる廊下に着陸。そこで勇氣が目にしたのは、

「…ッー!」

血塗れで横たわるシスターのような少女と、彼女を庇うように立つウニ頭の男、そしてその二人に膝をつきながら対峙する赤髪で長身の男。その赤髪の男が勇氣に尋ねてきた。

「君は何故『人払い』の影響を受けていないんだ!？」

「ああ、あれ『人払い』って言うの? まあそんなのどーでもいいだろ。そんなことよりも俺はさあこの状況の説明が欲しいんだよね。ウニ頭の君、何か知ってるかい?」

ウニ頭の青年はその問いかけに答える。

「簡単に言うぞ。一つ目はその女の子があいつに狙われてるってこと。もう一つはそいつが『魔術師』ってことだ!」

勇氣は彼が真面目に言っているのは分かった。しかしその言葉を容易には信じられなかった。

(は? 魔術師? そんなのいるわけねーだろ。)

しかし現場の状況がそれを真実だと肯定していた。

(魔術師、ね…。)

「僕を無視するなんて随分余裕だね! — 灰は灰に — 塵は塵に — 吸血殺しの紅十字!」

その言葉と同時にトランプのような物から炎が吹き出てくる。勇氣は目を見張りながらも、

「甘いぜー!」

と言つて勇氣の前方の酸素の質量を増加させた。すると勇氣の前方の空気から酸素が無くなり、炎は消失した。

「今度は俺のターンだぜ。」

勇氣は足で地面を蹴り飛ばす。その時に作用反作用の法則を操作し、亜音速で赤髪の男に接近した。

「な、なんだと!?!」

「吹き飛べ、雑魚が。」

勇氣は突風を起こして赤髪の男を吹き飛ばした。

「ふう。んで、君は見たところ敵意は無さそうだけど、その子をどうするつもりだ?」

「どうって... そりゃ病院にー」

「無理だな。その出血量じゃあ着く前には死ぬぜ。」

「じゃ... じゃあ、どうすればいいんだよ!」

勇氣はしばらく熟考し、

「悪いがそのシスター、人を癒す魔術というのはあるのかい?」

「お、おい! 怪我人に喋らせるなよ!」

その言葉を聞くと、勇氣は彼の胸ぐらを掴み、

「一時の苦しみを味わうことと死ぬこと、どっちをお前は選ぶ?」

彼はそれを聞いて言い返そうとしたが、

「いいの、当麻... うん、回復魔術はあるんだよ。でもね、あなた達

二人には使えないの。」

「な、何でだよ!?!」

「基本的に魔術は才能の無い人のためのものなの。あなた達みたいに才能ある人には使え無いんだよ。」

「で、でも俺はレベル0だから...。」

「関係無いんだよ。能力開発を受けた時点でその人は魔術師とは回路が変わってしまうんだよ。もしあなた達が魔術を使ったら、死に至る可能性もあるんだよ。」

「くそッ、じゃあどうすれば…。」
「……………」

シスターは苦しさを隠そうとしながら言う。

「あなた達二人には本当に感謝してるんだよ。だからー」

「いいや、まだ終わってない。」

それを勇氣は遮る。

「この街の全員が能力開発をしているわけじゃ無いだろ？そう、大人だよ。あいつらは魔術を使えるはずだ。えーと、当麻、だっけか？心当たりはないか？」

当麻は少し考え閃いたのか、ハツとした顔になり、

「小萌先生…！」

「教師か。妥当なところだな。だけど当麻、そいつの家はこっから近いのか？」

「ああ、かなり近いぜ。歩いてすぐだ。」

勇氣は少し考える素振りをし、

「成る程。じゃあ当麻はシスターを抱えてくれ。そして俺が能力で空を飛ばば一瞬で着く。」

当麻は少し遠慮がちに、

「すまない。俺の右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）っていう能力があつて、それが異能なら神の奇跡だろうが打ち消してしまうんだよ。」

「その効果範囲は？」

「右手首から先だけだ。」

勇氣は不気味に笑い、

「なら大丈夫だろ。俺が当麻を脇に抱えればいい。ただしー」

勇氣は悪魔のような笑顔で当麻に、

「絶対俺に右手で触んなよ。」

ー小萌の住むアパートー

そこには顔が真っ青な上に息が荒い当麻がいた。

「よし。何事も無く到着したな。」

「あれえ？あれえー!?上条さんは完全スルーでせうか!？」

「大丈夫だ当麻。気分が悪いだけだろ。俺達忙しいから、うん。さっさと行くぞ。」

そう言っただけなら小萌の部屋へと向かう。

「……」

当麻がインターホンを押すと、

「ちよつと待っててくださいーい！」

と声が聞こえた。それを聞いて勇気が

「すまない、当麻。シスターの回復には立ち会えないんだ。親に門限を破る許可を貰わないといけないからな。20分後には戻って来るよ。」

当麻はそれを聞いて笑いながら

「気にすんな。行ってこい。」

「サンキュー。」

勇気は能力で飛翔し、全く人がいないところに着陸した。そして「おい。監視なんてセコい真似してないでさっさとかかってこいよ！」

と言うと、こちらに歩いてくる人影を見つけた。その人物は

「お見事です。視線に気づいたこと、更に『人払い』の三次元的な対処。素晴らしかったです。」

「あつそ、んでお前も魔術師か？」

「ええ、そうです。私は魔術師でありー」

彼女は腰に提げている刀の柄に手を置き、

「世界に20人といない、聖人です。」

勇気は彼女からの覇気を感じながらも、

「ハッ、そんなのどーでもいーんだよ。どーせお前もシスターの回収に来たんだろ？」

「回収じゃなく、保護です。さあインデックスをこちらに渡してください。」

「あいつは物じゃねえ、だから渡せないな。」

「そうですか、交渉は決裂ですね。ではー」

彼女は腰を低くし、言った。

「神裂火織（かんざき かおり）、行きます！」

そして神裂は刀を抜き放った。勇気は

「隙がありすぎるぜえ！」

と言つて亜音速で突撃するが、

「チッ！」

キラリと光るのを見て即座に真上に飛翔した。

「成る程。ただの抜刀と見せかけたワイヤーでの攻撃とはな。やるじゃねえか。」

「あなたも今のをかわすとは、やりますね。」

勇気は不敵に笑い、

「今度は俺のターンだぜー！」

分子を高速で振動させることで空気を熱くした後、その空気で突風を起こす。つまり…

「くっ！熱風ですか！」

神裂は風から逃れようとするが、

「まだ終わらないんだよなあ。」

勇気は砂鉄の質量を空気より小さくすることで、砂鉄を巻き上げた。それにより一瞬視界を奪われた神裂は回避行動が遅れ、

「があああああ！」

熱風が直撃した。更に

「おーいおい。砂鉄をただの目眩ましと思っちゃダメだぜ。」

勇気は風で砂鉄を互いにぶつかり合わせ、より鋭くしていった。そして

「死ぬなよ、神裂。」

大量の砂鉄を突風で一気に吹き飛ばした。

「なッ…！」

神裂は音速で回避を試みるが全てはかわせず、

「ああああああ！」

砂鉄が神裂を切り裂いていった。

砂鉄の嵐が終わった時には、神裂は火傷と切り傷でボロボロだった。それを見て勇気は、

「諦めろ。お前じゃ俺を倒せねえ。」

「嫌です。」

「そうかよ、じゃあ…。」

キ エ ロ

勇気が足で地面をつついた瞬間、神裂の真下の地面が10メートル程盛り上がり、神裂は空に放り投げられた。

勇気は神裂に向かって飛翔し、

「あばよ、雑魚が。」

神裂の顔面を思いきり殴った。神裂は地面に叩きつけられ、勝敗は決定した。

勇気は着陸し、アパートへと戻りながら、

「チッ、つまんねえ闘いだっただけ。」
と言いつつ放った。